覗く眼

第2回

源治と沢井は、古びた千餓村の交番をまじまじと見つめた。

本来白いはずの壁は、所々が土色に変色している。また大きな亀裂が、いくつか入っているのも目につく。東京の街ではこんな建物は、どんどん建て替えられている時代だが、この村では後何年経っても、建て替えられる事などないだろう。

「こりゃあ、骨董品ですね」

沢井は壁を撫でながら、軽口を叩く。

源治もつられるように笑いかけたが、ふと思う。

これこそが、己の姿ではないだろうか？

一人だけ時代に取り残され、若い連中からは笑われ、馬鹿にされる存在。そう思うと沢井に対してさえ、反発する気になってくる。

「あの～」

危ういところで源治を現実に引き戻したのは、交番の中から現れた、のんびりとした警官の姿だった。

「ああ、これはどうも。本庁から来ました、沢井です」

沢井は引き締まった顔になり、深々と頭を下げた。

「ああ」

警官は沢井の後ろにいる、源治に目を向ける。

「大内源治です」

源治も顔を引き締め、頭を下げる。

「千餓村駐在の、田部です」

こののんびりした男が、この小さな村の治安を一手に担っているのだと思うと、今度の異様な事件はさぞ荷が重いと感じただろうと、源治は不憫に思う。

「まあ、どうぞ中へ」

そう言いながら狭い交番の中に二人を招き入れ、そそくさとパイプイスを用意する様は警官と言うよりも旅館の年老いた小間使いのようにも見える。

「田舎で、びっくりされたでしょう」

お茶を入れながらする話題も、小間使いそのものだ。沢井は苦笑いをしながら頷いているが、源治は仏頂面で愛想もない。別に機嫌が悪い訳ではないのだが、場や相手に合わせるというのが苦手なのだ。

「この村で長年駐在をやってきましたがね、こんな事件初めてで・・・」

湯気の立つお茶を並べながら、警官は話始めた。源治は、この男なりにとまどいは大きいのだろうな、と感じる。

「それで、被害者の身元は判明したんですね」

沢井は、早速メモをとる準備をしながら質問を始める。自分が誘導しないと、話が整理できないと感じたのかもしれない。

「ええ。瀬上新助という男です」

「どんな男なんですか？」
沢井が事務的に、質問を続ける。
「この村の百姓です。歳は二十五」
「殺される理由で、思い当たるものは」
「いや、特には・・・」
田部が首を捻る。
「何か身元がわかるものでも見つかったんですかね」
源治が口を挟んだ。
「いや、そんなんじゃないんです。ただあの事件の夜から行方不明になってるんで」
「じゃあ、その瀬上という男かどうかの証拠はないんですね」
沢井が身を乗り出す。
「はあ、何しろあんな死体ですから・・・とてもじゃないですが瀬上だったかどうかなんて、わかりません」
源治は田部が今にも嗚咽あげそうにしているのを、ますます哀れに思った。
「死体は、ご覧になったんですか？」
「そりゃあ、もちろん。私はこの村の警官なんですからね」
沢井の問いに、田部は口を尖らせた。この男なりのプライドかと思うと、源治はおかしくもあった。
「県警の方と一緒に。そりゃあ、酷い死体でした」
田部の顔の色が目に見えて悪くなっていく。言葉に詰まったのか、交番内に重い沈黙が流れ、時間が止まった。
「田部さん。応援に来ておかしな話なんですが、私たちはあまり情報をもらってないんです。話していただけますか」
「そ、そりゃあもちろん」
沢井の言葉にまた反発するかのように、田部は死体の状況を口にし始めた。